

108. <草鞋を作る人>

正月は何と言っても寝正月が一番です。おせちや餅を食べ、酒を飲んでほろほろしているのはまさに極楽です。しかしながら、正月休みが終わると、寝正月の間に着々と成長を遂げた腹回りを見て後悔することになります。

貯めこんだ皮下脂肪を消費するには、何よりも歩くのが効果的ですが、正しい歩き方の基本は、「背筋を伸ばし、軽くあごを引き、腕は『く』の字で振りを大きく、踵から着地」ということだそうです。しかしながら、明治初期までの日本人の歩き方は現代とは相当異なっており、右手と右足、左手と左足を同時に出して歩いていたという説があります。足も膝を上げて踵から下すのではなく、摺り足で足指に重心をおいて歩いたようで、明治期に来日した外国人の多くが、「日本人は何だかダラダラと歩いている」という印象を受けたそうです。

履物についても、このような歩き方に適した「足半（あしなか）」という足の前半分だけの草鞋（わらじ）が中世以来広く使われていたそうで、農村部では半世紀前までは使われており、長良川の鶴匠は今でもこれを着用しています。

さて、草鞋といえば、「駕籠に乗る人、担ぐ人、そのまた草鞋を作る人」という格言があります。これは「世の中には様々な立場や職業の人がおり、それが相互に関連しあって社会が成り立っている。」といった意味です。ご参考までに、この格言のフルバージョンは「箱根山、駕籠に乗る人、担ぐ人、そのまた草鞋を作る人、捨てた草鞋を拾う人」というのだそうです。このフルバージョンには、リサイクルの概念まで入っているのが素晴らしいと思います。

下水道の世界で考えてみると、「駕籠に乗る人」は市民や事業所等のユーザ、「駕籠を担ぐ人」は下水道を計画、建設、管理している地方公共団体や民間企業等にあたるのでしょう。ここで、当事業団（J S）の技術開発や研修業務は、「草鞋を作る人」なのだろうと思います。駕籠に乗る人が草鞋を作る人を目にすることは無いように、技術開発や研修は直接見えにくいのですが、駕籠を担ぐ人が草鞋無しでは歩くこともままならぬように、下水道の足元を支える重要な役割を担っているのです。

昨今の厳しい経済状況から公的機関、民間企業とも技術開発等にはコストをかけづらくなって来ており J S も例外ではありません。しかしながら、技術開発や研修には継続性が何よりも重要です。平成 23 年度から、J S の技術開発は拠点を本社に移して技術戦略部となり、新しい技術導入制度を活用した新技術の迅速な導入を目指しています。また、研修でもニーズに対応した新しい研修を始めています。これからも、下水道のために軽くて丈夫で歩きやすい草鞋を作り続けて行きたいと思います。

<日本下水道事業団 理事 村上孝雄>

※ J S 技術開発情報メール No. 122 号(2012/1/5)に掲載